

大統領選挙に見るハンガリー国会

盛田 常夫

ハンガリーの国会を見ていつも感心するのは、議員の演説にたいして野次がないことだ。拍手や笑いはあるが、野次はない。かつて、野次の内容が問題になり、国会が紛糾したことはあるが、これはきわめて稀。もしかして、ヨーロッパには野次という観念がないのかもしれない。他人の意見を良く聞き、賛成できなければ反論する。このように理性的に振る舞うのが、エチケットになっているのかもしれない。国会中継を見ていて、これは気持ちが良い。

逆に、どうにも理解できないこともある。重要法案の採決以外は、国会の一般討論に議員が出席していない。5名とか10名の出席で、国会の一般討論が行われている。いくら一般討論でも、これでは会議が成立しているとはいえない。テレビの国会中継を見ると、いつも空席だらけというより、議員が数名いるだけなのだ。一般市民も、国会中継を見て、国会議場に議員がいないことを知っている。何の改善もないのはどうしてだろう。

失われたプロトコール

2000年1月1日。ハンガリーではミレニウム国会が開催された。いわば千年に一度の行事だ。そこに国会議員の家族も特別招待された。もちろん傍聴席への招待だ。この話を聞いた時にふと思った。「もしかして、セーター姿で現れたり、幼児を議場に入れたりする議員がいるのではないか。ハンガリーならあり得ることだ」、と。だから、大統領の記念演説がテレビ中継された時に、議場の議員席を注意して見た。

この予測は間違っていなかった。落ち着いた幼い幼児を膝に座らせている議員がいる。それも一人ではない。テレビ画面で確認しただけで、3名はいた。その内の一人は、こともあろうに、大統領の演説が始まっているのに、遅刻して子供連れで議場に入った。もう記憶が薄れている

が、この議員、セーター姿で入ってきたと思う。あるいは別の議員だったかもしれないが、とにかくセーター姿でミレニウム国会に臨んだ議員が数名いたことも確かだ。

ハンガリーの国会にはプロトコールという観念がないのだろうか。せめて、議場の衛視が子供の入場を止めさせたり、セーター姿での入場を拒否したりする取り決めがないのだろうか。こんなことは田舎の議会でも滅多にないことだ。

それから暫くして、マトルチ経済大臣と会食した。何でも言ってくれというから、この件も伝えた。もう少しプロトコールをちゃんとしたらどうかと助言した。彼もその日のことを思い出して、そう言えば、どの政党の誰某がセーター姿だったとか、子供連れだったとか記憶を辿っていた。

今のハンガリー人には、規則を作っても、きちんと守れない性癖がある。とくに、共産党の支配体制が崩れて、すべての強制から解放された反動が多くのところで見られている。もっと根を辿れば、共産党の旧体制そのものに原因を見つかることができる。プロトコールは儀礼的な慣習であり、一つの文明的慣習ある。ところが、共産党の支配下では、指導者も一般市民も、市民社会の文明を身につけることができなかった。専制的社会では自発的な個人の文明的行動が育成されない。体制が変わっても、人々の行動様式は急に文明化されたりすることはない。逆に、体制転換という価値の逆転が、非文明的な行動に拍車をかけることもあるのだ。千年に一度の式典に、セーター姿で出席したり、幼児を同伴したりという非常識がまかり通る理由だ。

醜い戦術合戦に終わった大統領選

前号でも触れた通り、新しい大統領にショーム・ラースロー元最高裁長官が選出された。投票当日の野党の行動は、きわめて興味深いも

のだった。まず、FIDESZはショーヨム・ラースローを支持すると宣言しながら、第1回投票では議場に入場せず、投票しなかった。

その言い分が奮っている。「裏切り者をあぶり出すために欠席した」という。ショーヨム支持のMDFが、MDF分裂の際に助け船をだしてくれたスィリへの恩返しとして、裏切る可能性があるからだという。そして、第一回投票でスィリが183票を獲得したのを見るやいなや、MDFの裏切りを非難し、返す刀で与党MSZPがカネでMDFの票を買ったと攻撃した。何票か流れない限り、スィリが183票も獲得できないはずだからである。しかし、このFIDESZの欠席戦術は国会への侮辱行動以外のなにものでもないだろう。個人の信条を尊重して、秘密投票になっている選挙である。MSZPを党利党略と非難しながら、自縄自縛に陥っている。

ところが、翌日になって、国民フォーラムの議員団（MDFからの分派）の1人が、与党の計算を混乱させるために、わざとスィリに投票したことを明らかにしたのだ。そして、この国民フォーラムの議員は、第2回投票で、全員がショーヨムの名前を書いた投票用紙をプレスに見せたり、自分の投票用紙を携帯のカメラで撮影して送ったりすることまで行った。この国民フォーラムは大統領選挙終了の翌々日、FIDESZとの選挙協力協定を結んだ。弱小の国民フォーラムにとって、FIDESZに忠実なところを見せるパフォーマンスが必要だったのだ。あまりに幼稚な振る舞いに開いた口がふさがらない。

社会党の敗北と国会規則の軽視

秘密投票の用紙をプレスに集団で見せたり、携帯で撮影したりするなどという行動を許す国会などあるだろうか。これも国会プロトコル欠如の現象の一つだ。議員バッジが欲しいばかりに醜いパフォーマンスをやった国民フォーラムだけの責任ではない。そのことにきちんと対処できない国会の政党はすべて同罪だ。どうしてハンガリーの国会はこれほどまでに間抜けになったのか。理解するのが難しい。メディアも

メディアだし、政治評論家もどうかしている。このことをきちんと指摘する人が、ほとんどいないのだ。皆、同じ穴の貉だから、自分たちのやっていることの異常さに気づかない。もっとも、日本の国会はどうなのだと問われれば、返す言葉もないが。

さて、この大統領選挙で、社会党は政治的敗北を喫した。それもオンゴールで負けた。それもこれも、甘い見通しと戦術的失敗からだ。

まず、明瞭な失策は棄権票の取り扱いである。SZDSZが棄権の意思を表示していたので、国会の投票規定委員会は、棄権票を投票基礎票から除外するという決定を行った。SZDSZはこれに反対したが、社会党は賛成した。棄権票を投票基礎票として算入しないことは、棄権を議員の意思として排除することを意味する。これは民主主義にかかわる問題で、社会党がこれに簡単に賛成したのは間違っている。

もし棄権票が基礎票に算入されれば、第3回投票でも大統領が決まらない可能性が大だった。ところが、社会党は何を思ったのか、これを避けるために、基礎票の除外に賛成した。スィリ選出によほどの自信がない限り、この決定は理解不能だ。あるいは、最初から明確な戦術がなかったのかもしれない。結局、これで勝負は決まってしまった。

3回目の投票で大統領が決まらなければ、スィリも候補辞退の言い訳が立った。そこで、社会党はグラッツあるいはビハリを擁立すれば、連立政権の大統領が実現し、政治的敗北を喫することもなかった。ところが、社会党は自らスィリ選出の条件を狭めたあげく、スィリ一本で最後まで突っ切ろうとした。公算のない無謀さが、政治的敗北をもたらした。負けなくても良い選挙戦に、自らの戦術ミスで負けたのだ。明らかに、勢力関係を見捨てた左派の猪突猛進と、それを制御できなかった党の指導部の読みの甘さと戦術的失敗が不要な敗北をもたらした。そのことを明快に指摘している議員がいない。これでは、来年の選挙を勝つのは難しいだろう。

（関連記事は、<http://morita.tateyama.hu>を参照されたい）